

フランスの都市暴動 ークリシーのディラン市長との対話ー

鈴木 礼 暁

はしがき

2005年10月27日、クリシー・スゥ・ボアで、警官に追われた黒人少年が逃げ込んだ変電施設で感電死したことに端を発し、車の焼き討ちや警官と黒人らとの小競り合いが起こった。この小競り合いが4日続いた後、暴動（騒動）は隣のランシーや少し離れた県都のサン・ドニをはじめフランス全土のルアン、ディジョン、リール、リヨン、トゥールーズ、ストラスブールなど主要都市に広まった。暴動は11月17日に沈静したが、その間9,000台あまりの自動車が焼かれ、3,000人弱が警察に拘束され、56人の警官が負傷する事態となった。また、11月9日、非常事態法l'état d'urgenceが25の県に適用され、それに伴いアミアンやオルレアンなどで夜間外出禁止令l'interdiction de sortieが発令された。これは、1955年4月3日に同法が改定されて以来初めて適用されたものであり、今回の暴動の甚大さと、フランス政府の対応の深刻さを表すものであろう。

この事態に世界各国が反応したが、日本のマスコミや論壇でも報道・論評がなされ、『現代思想』では、事態沈静後3ヶ月たらずの2006年2月に「フランス暴動」という総特集を組んでいる。

以下は、クリシー・スゥ・ボアの市長であるクロード・ディラン氏との暴動をめぐる対話である。同氏とは過去に3回の対話を行ってきたが、時間の余裕がなかったにも拘らず、以前にまして、同氏の政治姿勢や郊外問題への対応に見られる民衆的視点が強く感じられるものであった。ここで、同氏の議論の論評は出来ないが、同氏が特に強調するのは、今回の出来事背景について、民族的・宗教的観点からではなく、政治的・社会的観点から議論すべきだということである。また、住宅、

健康、交通、教育における、特に都市郊外での不平等やそれらに関する施設の不備や、左右を問わず政治的エリートたちの事態認識の非現実性が指摘されている。

対話は友人のファブロー氏の協力があって実現したものであり、いつもながら同氏に深く感謝するものである。この報告は、2006年度札幌大学研究助成（海外出張）の補助を得て行った調査研究の一部である。

インタビュー

このインタビューは2006年8月31日にクリシー・スゥ・ボアの市長室で行われたものである。

暴動について

質問

昨年フランス全土に広がった暴動の引き金になったのが2人の少年の死に抗議して起こったクリシー・スゥ・ボア（以下ではクリシーと略称する）での出来事だったのですが、市の責任者である貴方がどのように考えているのかお聞かせください。

市長

暴動には社会的・政治的性格があったと思います。この問題についてのフランスでの議論は、民族的・宗教的観点からなされました。この面がなかったとは言いませんが、私は暴動の主要な原因、むしろ基本的な原因は社会的なもので、政治的原因が第2であったと考えています。何が起こったのでしょうか。フランス社会を政府の立場や政治的論争の観点からではなく見ると、フランスはここ30年ほどの間、本当に追放と排斥の土地になっています。貧困はいつも存在してきたので、つまり、いつでも貧困地区と富裕地区がありますから、貧困に過敏になる必要はありません。逆に、フラン

スで現実に行っていること、それは、まさしく追放と大きな不平等の地域が存在し、貧しい地区の住民が、フランス社会からかけ離れて排斥されていると感じる地区に多くの人々が住んでいると思っているということなのです。誰かのように、“彼らは外側に幽閉されている、”ということもできるでしょう。彼らはフランス社会の外側に幽閉されているのです。

こうした人々の日常生活はどのようなものでしょう。かれらは大きな不平等の中、つまり住宅、交通、教育、安全の上での不平等の中に生きているのです。いずれも彼らにとって大事なことから、どちらが重要かと順序づけずに言います。健康もその一つです。明らかに、彼らは基本的なサービスに平等なアクセスができないと感じております。

クリシーでの住宅事情は、個人所有の建物の質が低下していますが、それらがまさに個人所有であるために当局が関与するのが遅れるということから、カタストロフィクです。多くのクリシーの住民がまったく受け入れがたい条件の中で暮らしているのです。交通は、イル・ドゥ・フランス州の大多数の住民の現状より明らかに下回っています。どの地域に住もうがそれが簡単だなどというつもりはありませんが、私が市庁舎から駅まで車で行った後、パリの中心に行くまでには1時間15分から1時間30分を必要とします。クリシーに住む学生にとって、一番近い大学に行くまでに1時間半かかり、帰りも同様です。これは、イル・ドゥ・フランスにおける平均を大きく上回ります。こうして、住宅、交通、公共サービス、雇用について同様な困難を抱えているのです。

フランス全土の失業率は9%ですが、クリシーでは現在平均20%です。そしていくつかの地区では、当然20%を超えています。また、市には失業対策のためのANPE（国立雇用局）やASSEDIC（商工業雇用協会）の事務所がまったくないのです。クリシーはセヌ・サン・ドゥニ県の中で、若者が最も多く住む町のひとつです。年間出生数はフランス全体（1999年人口：60,185,831人）で70

万人であるのに対し、クリシー（1999年人口：28,274人）では約700人です。クリシーでは住民の半分が25歳未満です。

また我々はCAF（家族年金公庫）を持たないでいます。我々は市の行政の枠内で支所を立ち上げましたが、それは国の計画によるものではなく、我々の側の意志に基づくものでした。この公庫は複数の理由から閉鎖し、現在クリシーの住民は最も近いロスニー・スウ・ボアにある公庫に行かなければなりません。そしてそこに行くためには、公共交通機関で1時間近くかかるのです。家族年金公庫に子連れで行き来するのは難儀なことです。このような日常生活を送っている者こそ、大きな不平等の中にいるのです。

ほかに大変雄弁に物語る数字がありますが、学校のことです。様々な対応策を取りえたのですが、教育上の失政が起こりました。第3サイクル、つまり中学の最終学年までに順調に進級できなかった子供の比率がクリシーでは22%でありました。クリシーの生徒たちの22%が少なくとも1回は留年しているのです。これはセヌ・サン・ドゥニ県の平均の2倍です。これは、この市の子供たちが教育に関して周縁にいることを示すもので、この住民たちはそれに苦しんでいるのです。クリシーの住民たちの生活の苦しみは、アフリカのいくつかの諸国の苦しみに比べれば小さいかもしれませんが、明らかにフランスの多くの人々が持つ苦しみより大きなもののなのです。

ところで、このような苦しみに対して様々な反応が起こります。最良の方法とは言えないものの一つが、一定の若者の間に起きたドラマでした。敢えて言えば、幾分かの驚きを禁じえない、後に暴動を引き起こすに至るまでの怒りが表現された状態の中での、二人の子供の感電死でした。そして、フランスでもその他の国でも、若者が自分たちのためになる学校や体育館を燃やしたことに驚く人々にとっては、先の出来事はフランス社会の現状に対する彼らの誤解を証明するものでありましょう。というのも、これらの若者は、まさに制度、特に、彼らの苦しみの原因と受け止められて

いる学校制度を告発しているのです。それが正しいのか間違っているのかはともかく、これが彼らの考えていることなのです。正直に言って、彼らが間違っているということを彼らに示すために議論をしたいのです。つまり、これ以上はあり得ないほど彼らを悪くしている諸制度を告発するというバイアスの中でフランス社会に対する憎しみを彼らが発展させているのは、おそらく正しくもあり間違っているのです。しかし、括弧付きで言いますが、彼らが排除されていることの悲惨さについて、制度を告発するのは彼らだけなのです。そこに問題の根があります。

ここ二年来、政府は、社会の連携と一体性を作ってきたアソシエーションに対する補助金を削減し、協会は、彼らの活動資金が3万フラン減少するのを見てきているので、苛立っているのです。これはしかし大きな額ですよ。したがって彼らは活動内容を減らさざるを得ず、社会の連携と一体性に貢献してきた者として、怒っているのです。

また、サルコジの表現が問題となります。それは、私見では、様々な理由から大きな疑問のあるものです。なぜなら、そのような表現は曖昧なものであったし、たぶん彼が想定する範囲を超えて、国民の感情に触れ、侮辱してきたのです。案外彼はそれに気づいていないでしょうが、多くの国民が、わずかな人間にしか影響しないと彼が考えている言い回しに、彼の軽蔑や侮蔑を感じているに違いないのです。郊外で、若者を含む多くの住民が自分なりにその言葉を捉えたのです。というのは、私にとっては実に社会の“屑ども (la bande de racailles)”という言葉は、大臣の口から出る言葉とは思えないからです。犯罪者という言葉はあるでしょうし、非行少年という言葉はあるでしょうが、社会の“屑ども”という言葉はあり得ません。

質問

それは、巷での用語ですよ。

市長

そうですが、それ以上に小児科医（筆者註：ドイツラン市長は小児科医）が幼児に使うようなレヴ

ェルの言葉使いですよ。大人が子供に接する時、大人の言葉では話しません。大臣であれば共和国で通用する言葉を用い、特別の境界で使われる言葉を用いないものです。“それはそうだが、サルコジは彼らと同じ目線で話したかった”のだからと言い、正当化しようとするかもしれませんが、そうであってはならないのです。もともと、このような難しい問題を抱えた地区の若者たちの用いている言葉は、ほとんどのフランス人が用いている用語法とさえ異なるもので、そこに暮らすことなしに、正確に彼らの用いる言葉の意味を理解することはできないのです。したがってサルコジの言葉使いは異様な効果を齎したのです。私は、それが彼の誤りから来たものであったと言うつもりはありません。私が喚起したいのは、社会の不幸なのです。そして、事件が起こった場面自体、二人の若者が死んだ場所に関して、警察も内務大臣もそこを隠そうとしたのです。もちろん、哀れみのしぐさも見せませんでした。私はマリク・ウセキヌが警棒で打たれて死亡した後、ミッテランが彼の両親に弔辞を述べたことを思い出します。

（筆者註：対話の約4ヵ月後、ウセキヌの死の20年後、2006年12月6日に、パリ市長ドゥラノエが彼のメモリアルプレートを被害現場パリ6区 Monsieur le Prince通20番地の歩道に埋め込み、ウセキヌの死を悼んだ。）ところがクリシーでは、誰も何のそぶりも見せませんでした。亡くなった2少年の家族は首相に迎えられ、というより召喚され、また、首相が内務大臣を、家族が会うことを望まなかったのに予告せず同席させました。したがって、対応がよくなかったと思います。共和国は、取るべき方法を取らなかったのです。

クリシーでの事件は小さいいわば突発事件でしたが、別の郊外コミューンに伝播したため重大なこととなったのに、共和国やその県における代表者も催涙弾の発砲があった時、何の反応もしなかったのです。発煙弾はモスクの内部で意図的に発砲されたものではありません。それはその脇で発砲されたものでした。警察が、なにか示すものがなかったのがそれがモスクであるということを知らな

かったのですが、またその後発煙弾がモスクの中に誰によって投げ込まれたのかは分からなかったのですが、それが催眠弾であることは、私がすぐそこに入り、ガスにより涙が出たので分かったことなのです。もし共和国がなすべきことをしていたら、つまり当地に来ていたら、そして国の高い地位にある責任部署から、回教徒住民に対してこの事件は残念なことであり、共和国は、シナゴグが攻撃された時、どのような宗教であれ礼拝を行うことを保証すると言って、回教徒の住民たちを安心させていたらどうなったでしょう。教会や寺院が攻撃される時、いつも明白なリアクションがありました。事態に関して私が問題としているのは、回教徒の住民に、“モスクが攻撃されること、それは共和国が攻撃されることなのです”と説いたのが、共和国の象徴のほんの小さな受託者である私だったということなのです。知事も大臣も首相も大統領も回教徒の住民を安心させるために出向かなかったのです。そしてこのことは、侮辱として受けとめられたのです。すなわち、同じような事態に対して異なった対応をするという受け止められ方です。ユダヤ教の礼拝場、あるいはユダヤ教徒の住民が攻撃された場合、共和国の資格でなされるリアクションは明らかなものですが、ここでは、回教徒たちは、同じような事態に対して異なった対応をしたと感じたのです。

こうして、私にとって、暴動は、ゲットーつまりこの大きな不平等地域を放置したフランス社会の一種の偽善の果実にほかならないのです。多くの警鐘が見られました。非常に多くとは言えませんが、何人か、つまりフランス全土で10数人の市長が、このようなゲットーを存続させることの危険性について、公権力に警戒するように懸命に働きかけました。火薬庫のあることを示そうとした切れ目のない暴動が起きましたが、炎上した地区はそのようなものであり、それは予測できたのです。

皮肉にも私は全国都市会議の副議長でした。会議が政府に意見を提出することとなり、すべての意見、それは具体策として折衷的な立場に立って

いましたが、それでも状況の重大性と危険性を伝えていました。わたしはタルテュフの用語法を見習いました。実際、私は、フランス社会がタルテュフを演じているので、モリエールの言葉をもじって、“私が見ることができないように、郊外を隠してください”と表現することで、少しばかりメディアから評価されました。フランス社会は、自分の郊外の現実を見ようとしなかったのです。あるいは天使の立場に立ち、左派も往々にその道を選んだのです。このような郊外では、“誰もが優しい”のだとか、“若者たちしかいません”などと風刺したりしたのです。クリシーでは、2万8300人の住民のうち、多くても100から150人の暴動を起こす者がおり、2万8150人は、彼らの不平等について勇気を持って主張することなく、被害を受けているのだということを、私は一貫して主張しました。しかし、人はこれを見ることを望まないのです。

質問

そのような事態になったのは、メディアが進んでニュースにしたことにもよるのではないのでしょうか。

市長

そうですね。メディアは厄介な存在でした。しかし、メディアにはメリットがありますから、改めて通行改めをするつもりはありません。しかし、言葉の社会的意味でのジャックリーから学ばなければなりません。たしか14紀のジャックリーの乱ですね。ジャックリーの乱の主要な活動のひとつはパリで起こり、それはフランス全土に広がりました。この反乱は伝達されるまでに多くの時間を要しました。当時はテレビがありませんでした。しかしその時期、本当の政治的・社会的混乱が存在していたのです。当時の人々は外部と隔絶されていました。彼らは、その土地での混乱に対する政治的反応を十分に持つことはできませんでした。彼らには、意欲もはけ口もありませんでした。彼らは、あちこちで起こる小さなことの応急処置をする以外、フランス社会が政治的・社会的混乱を調整する手段を用意していないと感じたのです。

それで何が起こったのでしょうか。それは暴発でしたが、それは何だったのでしょうか。それは、火薬庫と火花の出会いだったのです。火薬庫と私が言うのは大きな不平等におかれた地域であり、火花はサルコジですが、その結果が二人の子供の死だったのです。

火薬庫は、それ自体として事実上存続しています。わずかな修正はなされましたが、残念ながら、私は暴発が再発する、さらに激しく再発することがあるだろうと考える者の一人なのです。

暴発には宗教上の原因があると考え、極右派、右派、一定の知識人など別のヴィジョンを持つ人に対しては、私は反対の立場に立ちます。そのような立場は、原因と結果を取り違えているのです。確かに、暴発があった地域には宗教上の原因があります。残念ながら、確かにクリシーにもイスラムの覆いを被った女性たちがいます。確かに、人がイスラム過激派と呼ぶ人々も見かけるのは残念です。しかし、彼らはどこから来たのでしょうか。人が大げさに共和国と呼ぶ、日常業務やサービスを受けている場所からでしょうか。私がイメージとして持つのは、共和国は、海が引き潮の時に引いていくように引いていくということ、また共和国が引いていく時、人は今まで見たことのないことが現れるのを見る、ということです。まさしくこれが起こったことなのであり、共和国はその時引いて行き、民族的・宗教的事象に席を譲ったのです。共和国が見えないとき、その価値をどのように信じるべきでしょう。単に国が見えないだけでなく、国によって馬鹿にされているとき、表現を許してもらいたいのですが、共和国の価値をどのように信じるべきでしょう。しかし、あなたが公共の建物に“自由、平等、友愛”を目にし、テレビで誰もが自由について話しているのを見聞きし、人々の生活が逆の状態にあると思う時、このような人々がもはや存在していない何かに自己同一化することをあなたは望み得るのでしょうか。そこで、彼らは別のことに自己同一化を求めるのです。私はそのことに同意はしませんが、民族的・宗教的事象に対抗するために戦うのではなく、

フランス共和国に具体的で日常的なセンスを持ち直させることです。そして、長く費用がかかるこのような歩みを進めるならば、民族的・宗教的事象の持つ重みは軽減することになるでしょう。

反対のことをしてはなりません。私は暴動が共和国への民族的・宗教的侵害であると主張するアラン・ヴィテルクロの言葉に反対し、それは逆であり、共和国が退去し、自由に任せたのだと思います。

質問

暴動の背景がよく分かりました。ありがとうございます。

市長

私はかたよりなく説明しようと思いました。

質問

ところで、暴動が起こってからの対策はどうだったのですか。

市長

対策？誰のです？二つの時期がありました。エモーショナルな時期がありました。その時、意図によるか不可抗力によるかは別として、人は幾つかの対策と約束を台無しにしたのです。例えば、協会に対する補助金を改定しました。政府は補助金を30%増額したと自負するでしょうが、実際は、政府はそれ以前に30%の減額をしていたのです。私は、それが悪い結果をもたらしたことを別にして、“補助金を立て直した”と言います。若者たちが私に、“市長さん、あなたが2年かけて成功しなかったことを、私たちは15日で勝ち取りましたよ”と言う時、私は彼らに何を答えることができるでしょう。その後、一方で資金が立て直されたことに満足しつつ、他方でそれが騒動の中でなされたことを考え、すこし当惑しました。公式の回答は社会的凝集でしたが、私は不適切であったと思います。その時、首相がCPE（初期雇用契約）を放棄する時期にいたのです。首相は、国のために、郊外の問題は別にして、CPEを通そうと考えていたのです。ところが、これは傍若無人なことでした。首相がこの道を進めなかったのは、強い抵抗にあったからでした。このことはまた偽善と

無知を示すものでしょう。この種の言説を拒否するという反応を予期しないのは驚くべきことです。政府をその地域から分離する世界があるのです。それは宇宙的でさえあります。

かくて、ひとは計算外のところにいるのです。現在は、情熱は去ってしまい、郊外のゲットーを解消するために動き出そうとするフランス社会の意志はもう感じられないのです。また私は、フランス社会に提示すべき二つの疑問があり、この疑問に非常にはっきりと答えられないならば、ゲットーの解消には行き着かないと私は確信します。最初の疑問は少し具体的なことです。“フランス社会にとって重要なことは何か”ということです。それはゲットーの中で秩序が行き渡ることでしょうか。もう聞こえてきませんが、サルコジがそれをするために答えたことです。秩序が保たれるように警察の力に頼ることです。サルコジらはこの道を取り、そのために市長たちを動員しました。それがサルコジの軽犯罪予防に関する法案であり、家族手当を圧縮しようとしているのですから、予防ではなく、市長たちを抑圧に加わせようとするものです。あるいは、第二の疑問は、“フランス社会がゲットーを解消しようと望んでいるのか”ということです。政治的・道徳的理由のために、あるいは効力に関する疑問のためにです。フランスは、内部の生活は無秩序にし、国際的観点から見てそのイメージを台無しにする郊外の新しい危機に出費する手段を持ち合わせているのでしょうか。私は、フランスがそのような手段を持ち合わせていないと感じています。もし人が、道徳的・政治的もしくはその他の理由からこれらのゲットーの問題を調整しないとしても、少なくとも、効率性の問題から行うでしょう。人は、国内的にも国際的観点からも、郊外の新しい危機に費用をかける手段を持っていないのです。

ところで、フランス社会は何を望んでいるのかということですが、答えは明瞭ではありません。私は大いに議論をしました。私は政府を批判しているのではなく、フランス社会に疑問を投げかけているのです。もしそう言ってよければ、フラン

ス社会は、焼かれる地域とともに生き残ることを望んでいるのでしょうか。また、“それは延焼する可能性があるのです。”それでもとにかく、社会は、それが各地域に集中し、自分たちのところに来ない分だけ、悲惨を生み出すものです。ランシーの市長は、パリにより近くにあり問題が非常に重要なので、他の市長たちより以上に騒いだのです。そして私はたぶんサルコジのもの以外、上のことに対する答えを聞いてはいません。サルコジははっきり、“秩序が支配しなければならない”と言うのです。人は後から手段を見出すでしょうが、まずは“秩序が行き渡らなければならない”というのです。しかし私は右派と同様左派からも、“それは単に秩序の問題ではない”という決断を聞いていません。もちろん、無法者は無法者で、ほかの何者でもなく、彼らと同様に貧しい犠牲者を生むことになるのです。クリシーで車を燃やせば、そのうち90%あるいは99%は貧しいものの車なのです。無法者に対していかなる愛想も言いませんし、私は無秩序を好む人間ではありません。

第二の疑問ですが、わたしはフランス社会が重要な問題を自らに提起しているとは思えません。フランスは社会のモデルを変えようとしておりますが、それを明瞭に自分の意思のままに行おうとできないのです。それは油断のならないことです。フランスは今日まで、単純に言って、2世紀以上“自由、平等、友愛”に基づいて生きてきましたが、これら3つの言葉をどのように生かしているのでしょうか。つまり、大雑把に言って、21世紀の言葉で話せば、“我々の社会の連帯をどのように組織するのか”ということです。右派と左派、彼らはこの連帯を組織するために異なる方向を持っていますが、共和主義的契約があり、それが我々の社会の核となると思います。私はといえば、あまりにも政治的であったので1936年のことはともかく、1945年のことを問題としましょう。レジスタンスの国民的プログラムを作動させたドゴール大統領の最初の政府の時、左派も右派も一緒になって、どのように連帯を組織するのか、すべての人に公共サービスへの接近をどのように組織

するのかということ非常に重要なことと考えていました。そしておそらくここ30年の間、まさに20年の間、この原則ということ、低い声ではあるのですが陰険に、“どのように競争を組織するのか”に置き換えられているのです。人はますます競争の社会の中に入っており、その中でサルコジのメリットは明瞭であるというメリットであります。彼は連帯ではなく、大きなグループ、地域そして国家に与しており、競争を保証し組織する為に、サッカー競技やオリンピックのように、一定の競争の規則が守られることを望んでいるのです。そして事態はまったくこのような事ではないのです。なぜなら、人が競争を組織するとき、勝者と敗者ができるのですから。

質問

しかし競技には審判があり、非常に明確な規則があるでしょう。

市長

しかし、社会での規則は十分に明瞭なわけではありませんし、社会の選択はもっと不明瞭です。ところで、私は、もし人がこの問題を調整できないなら郊外の問題を調整できないと考えるので、大統領選挙は利点を選択する可能性があるというナイーブに期待するのです。郊外の問題は、人が競争社会の中にいると、連帯の社会にいる場合と同じ方法で解決できないことは明らかです。ところで私は、政治的には、第二の選択の側に立ちます。私は、レジスタンス委員会の政治プログラムに大きな尊敬を払い、それを改めて行うということは言いませんが、その哲学は引き継がれるべきだと思います。私はといえば、それが私の政治へのアンガージュマンの基礎なのです。

質問

あえて言いますが、競争と連帯は当然には矛盾しないのではないのでしょうか。連帯はサッカーで言えば、闘争心と隣り合わせですし、競争は商品取引の中で国際的連帯がなければ成り立たないのではないのでしょうか。

市長

現在は、競争がフランス社会の内部で起こって

いるのです。非常に象徴的なことがあります。それは、DATAR（地域整備・活動局）が名前を変え、DIACT（地域整備・競争の超省局）となったことです。これは競争ではなく、考え方です。これはラファラン首相のもとでなされましたが、フランス人の本当に民主的な選択により生じたことでしょうか。確かに現在私たちは、競争を前に進めようと望んでいます。しかし、クリシーはそれに参加できないのです。人は、この超省的な競争の中で、スタートラインに立ち得るのか確かではありません。それはちょうど、百メートル競走をする際、30メートル後方から出発するようなものです。それで果たして勝利を望めるのでしょうか。

質問

そもそも100メートルを走れない者もいますね。

市長

このDATARの新しい名称は、哲学の変化を表すものです。レジスタンスのプログラムを作動させ、あなたの願いや目的を推進する哲学を持って地域整備を行おうとすれば、あなたがパリに住んでいても、海拔1500メートルのアルプスに住んでいても、あなたは同じ公共サービスを受けることができます。電気が同じ値段で供給され、交通機関により移動ができ、同様の教育に同様のアクセスができます。山の住民が全般的に見て、都市住民とほとんど同じ公共サービスが受けられるよう用意されています。あなたが競争の観念に入ると、あなたの目的は競争手段の強化となります。そしてアルプスの小さな町はなんら競争力を持たず、自らを支えられないのです。もちろん少し風刺化して表現しましたが。

質問

先の戦争の終盤フランス人を連帯させるという観念がありましたね。ドイツ人の協力やレジスタンスのおかげでしたが。単純に言えば、同じイメージを持ちますし、あなたはその意味でレジスタンスを参考に行っているのですね。

市長

私にとって、それは重要な参考となります。また、レジスタンスは可能なあらゆる次元から生じ

ております。そして私は、フランスにとって協同と変化の意欲にとってのよい機会だと思います。まさしく、このドラマの主題に加えるべき言葉となりますが、私が気に掛けるのは政治制度と国民との間にあるギャップです。もちろん、クリシーではそれははっきりしています。しかし、質問されたフランス人のうち70%が政治の責任者に信頼を置いていないということですから、クリシーの住民だけの傾向ではないと思います。悪印象は広範にわたり、また私たちは、政治に警戒し、制度に警戒し、教育に警戒している社会の不安の中に生きているのです。事件の後、国民教育に反対する議論が起こり私を驚かせたのですが、それはサルコジの“屑ども”という言葉から来たのではなく、家族の母親たちから出ていたものでした。私は、むかし大学で学んだ、したがって教育上の成功を得た若い婦人が、“もし私が彼らの機関に相談したら、私は美容師の資格を得ることになったでしょうから、私は大学で学びましたが、それは国の教育によるものではありませんでした”と話すのを聞きました。私はそのことを、不安にならないために、たびたび聞きました。人がそれを一度だけ聞くと、人はそれがルサンチマンだと言います。他方で、私はそれについて、国民教育を疑っている人々とともに、頻繁に聞いたのです。そしてクリシーでは、暴発に反対する人々の前衛で、私は別の意見を聞きました。同じフランス社会の投票に行かないような複数の地区で、人々が暴発を慎重に無視したり、辛くも受け入れたりしているのです。このように、それは事実であり、人は分析したり、修正したりしません。複数の地区では、人が言うように、住民が投票に行きません。そこに選挙活動に行くのは、彼らが投票に行かないのですから、無駄なことです。選挙活動の間、私はあらゆる手を尽くしてジョスパンがここに来ることを探りました。予約をする日がありましたから、私は彼の来訪の準備を始めましたが、人は、“クリシーの住民は投票しないのですから、その必要はありません”と言いました。つまり、人は、考えることなく、修正も望まず、クリシーのよう

な町の住民の大部分が信頼を置いていないということを受け入れていたのです。結果はどうだったでしょう。もはや信頼していないのはクリシーの住民だけではなく、全体が、投票しないか、極右に投票するかのどちらかだったのです。彼らは、左派でも右派でも既成の政党を信頼していません。大統領選挙のとき、ル・ペンが決選投票に臨みましたが、そこでは彼に対して“ノン”が突きつけられ、既成政党は“ウイ”を得ました。私はフランス社会が壁に突き当たっているのに、それを楽しんでいるような印象を受けました。

質問

政治家はこのような予兆を計算し得ないと言えるでしょう。

市長

残念ながら、同感です。すべての市長と同様に、クリシーの市長は状況を把握すべき幾分か特別の地位を有しています。人は皆、多かれ少なかれこの災難から逃れており、これは市長によります。そして私見では、政治制度が現在行っている以上の優れた内容を示さなければならないのです。

質問

ルアンの市長も同様の反応を示していました。状況に対する同様の観察です。彼は、“私は状況に不安を感じており、市民と政治家との間に距離があるのです”と言っていました。

市長

まったくそうです。社会党を御覧なさい。またすべての政党が同様です。現実の中で、社会党の指導部は、その活動家や選挙民と同様の社会学を決して持っていません。多くの者がそれを一般的な表現で提起します。私は、反CPEの運動の中心にいたUNEF（フランス学生連合）の委員長であるブルノ・ジュリアルと対談しました。彼は、“68年組が執着しているので、若者たちには場がないのです”と言って議論を閉め括りました。彼は間違っただけではありませんが、私は、オランダそれにロワイヤルらが20年前にそれと同じことを説いているのに立ち会いました。彼らは、解決不能な問題についてのトリックを組み立てていたのです。

しかし彼らは、同じ方式で教育されているのです。それは世代の問題ではなく、政治指導部のリクルートの問題なのです。彼らは皆、単に政治家だけでなくメディアの人間であっても、つまり知識人ですが、いずれにしても同じ世界から来ているのです。政治的、知的、経済的エリートと市民との間には差異があるのです。小さな企業の責任者と市民との間での差異はより小さなものでしょう。昨夜私は、MEDEF（フランス経営者運動）の大会で、何人かが一般人が考えることに近いことを話しているのを、テレビで見ましたが、いずれにせよ知的で政治的なエリートや大エリートが脇にいます。エリートがカーブをかけられる時、無数の民衆に影響を及ぼしているのです。人々がテレビを見てから後のこのような情報の効果を創造してください。

質問

さらに、カーブがかけられる時は、社会が大きな費用をかけることになりますね。エリートが大きな間違いをした時、カーブがかけられるのですね。

市長

それは本当です。エリートがカーブをかけられるのは、彼らがその任務で間違いを起こすからです。私たち、社会党では、少なくとも活動的党员としては、鏡となる指導部を持つことはできないのです。私は何度も指導部に招かれました。例えば、私は、同調者はおらず、社会党の党员証を持ちながら、党の方針と対立する議論を展開する300人の集会に参加したことがあります。そして、ある時期に、自分を残念に思いますが、また雰囲気から見れば少しデマゴジクで象徴的でしたが、私は、“この部屋で私たちは300人いますが、ENA（国立行政学院）の出身者は手を挙げてください”と言いました。勿論、誰も手を挙げませんでした。しかしもし、あなたが同じ質問をソルフェリーノ通りにある社会党事務総局でしたとしたら、二人に一人は手を挙げるでしょう。エナルクとしてはそうすべきでしょうし、私は彼らが社会党に加入することを好みますが、その代議員たちの二人に

一人がエナルクだというのはノーマルでしょうか。かつては、普通の家系から出て、大臣秘書室で大学卒業後すぐに政治的キャリアを始めたことのないデバルジュやドロールのような人士を登用する党があったのです。私は、社会党の中に多くの魅力ある人物を見出しています。しかし彼らは、決して自分の職分を行使していません。今日では、大学を終えるやいなや、あるものは大臣秘書室に入ったりしますが、このような人々はフランス社会と断絶しているのです。

饒舌だったかもしれませんが、私が大臣室で会った、ディプロームを有し任命された8日の後に様々な指示を下す若者たちですが、私が、彼らが命令を下す前に状況について情報を得て、分析をしているのかと尋ねるような場面があったことを取り上げたのです。市長は、措置を講じる前に診断を参考にするものです。市長はまた、自分の兆候の半分を隠している患者を問題とします。そこで、自分を隠すような社会について同じことが起こります。

他方で、私はフランス社会が衰退に向かっているとは思っていませんが、危機に瀕していると信じています。死にかけている物、終わろうとしている物がありますが、生まれてくる物は見えないのです。いずれにしても、この社会では私がブーランジェ將軍現象と呼ぶもの、つまり大掛かりなポピュリズムに向っています。サルコジやロワイヤルがポピュリストの演説に終始するなら、それは彼らの勝利と言えるでしょうか。右派なのであれ左派なのであれ、ポピュリズムは小さなポピュリズム独裁に至ります。最悪なのはサルコジによるものです。しかし、人々がうんざりしているので、何らかの最悪な事態は回避できません。彼らは皆疲れており、クリシーの住民の疲れは、他のコミューンの住民の疲れと同じものではありません。彼らの疲れは対抗しているもののそれです。警察官たちもひどい状態にあり、疲れ、同じ理由からではありませんが、郊外にいる若者と同様の感情を持っています。国民教育も同様で、私は初等・中等学校の教師たちと話しましたが、かれらも大い

に疲れた状態にあります。私は、対応策、なすべきことがあり、ダイナミズムがあると考えています。150人ほどの若者が車を燃やしたりしたので、私はクリシーのために奮闘しました。しかし他方で、少なくともその十倍以上の若者が学校を終了し、彼らの後続くことを望み、大きなエネルギーを割く若者たちがいるのです。クリシーの森の近くに住む若者は、大学に行くのに1時間半から2時間をかけ、一人はディプロームを得ました。私がこの若い女性について話すのは、彼女を支援しなければならないからではありません。フランス人は不便な地域を見捨てていませんが、エネルギーを有する若者は多くはいないので、そのような地域を包摂しなければなりません。ここにも競争力のある若者が多くいます。去年の暮れに、アカデミーの大学区長が来て、年に1度授与される国民教育メダルをある若者に授与しました。私はクリシーが時流に乗っており、メダルの授賞が稀なことだと思いました。若者の経歴を見ると、彼は勉強を続け、特に優秀ではないがエネルギーを持ち、クラスの代議員のポストにあり、フランス国民救済のための協会の活動家で、16歳の少年であることが分かりました。彼は、その協会ではとんどの時間を過ごしていたようです。私は現在、フランス社会でこの少年のように他人のためにエネルギーを使う若者を多くは見かけません。

私は自分の職務ですので、クリシーのために奮闘していますが、同時にフランス社会のためにも戦っております。フランス社会が市民の才能を活用しないのは初めてのことです。イタリア人の左官の才能、ポーランド人の坑夫としての技能をフランス人は活用してきましたが、風刺的に言えば、現存の十分なエネルギーを活用し得ていません。様々な才能を社会から追い出しているのです。殖民の歴史から、イスラムであるからなどによるものです。イタリア人はカトリックでした。現在フランスは非宗教的な共和国です。ところが人は、“事情は異なり、彼らは統合されることを知らないのです”と言うのです。しかし先ほどの少女は普通のフランス人よりも有能なのです。人はフラ

ンス社会を発展させ得る人々を閉じ込めがちなのです。われわれの内部には多くの富がありますが、互いを尊重することが大事だと思います。私はモランが言うことには反対で、フランス社会が、これまでなかったような、貧しいもの同士を、中産的なもの同士を、有産的なもの同士を区別し住み分けさせつつあるのです。このことについて、社会的なものを含め大きな活動はありません。

私はしばしば農場主の息子、ノルマリアン、共和国大統領などが幾分か疑わしい存在となっていると言っています。私の祖父は清掃夫で、父は学問を終えてはおらず、私は小児科医になりました。私が政治に取り組む理由の一つは、2000年には可能性が薄かったのですが、これらの庶民が住む地区に訪れて未来への予感を感じたからなのです。私は、私と同じ環境で生まれた子供たちが、私と同じチャンスを持っていないという印象を受けたのです。人が動きのない社会にいるため、多くのチャンスを持ち得ないのだと思います。ところがそのことはフランス社会の発条でもあるのです。登用のシステムはよく組織されていますが、我々の社会の躍動性はその社会の可動性に基づいているのです。我々の社会は2世紀の間ともかく躍動してきました。人が、説明されず、分析されていない我々の社会の転回点の中にいるということを言いたいのです。私が郊外の歌手やサッカー選手の才能について話せば、何らかのショックが起きるでしょう。しかしそれが郊外の才能だというのは 아닙니다。それは、毎日学校に通い様々な職種のCAP（職業適性証書）を取得する、男女の若者たちのことなのです。それこそが郊外の本当の才能であり、サッカー選手、ジダンのそれではなく、難しい状況の中で、さらに現存する雇用の際の区別のフィルターにかけられながら、試験に合格し、職業に就いている日常生活者のエネルギーなのです。芸能やスポーツやファッションの世界で働いている人々は称えられます。それに対してたとえば配管工はテレビ番組で紹介されることはありません。

質問

暴動の後はどうな傾向になっていますか。

市長

複雑です。今までしてきたことを続けています。わずかな手段で学校環境の改善を図っています。子供たちへの支援策を幾分か拡大しました。学校を終了できるようにするためのアトリエを作りました。現在700人の子供が登録し、来年かさ来年に1500人が試験を受けるでしょう。これは対策の措置を前提とします。私は住宅、教育、交通について住民に語ってきました。これは国の権限に属す任務、すなわち安全、法秩序、地域整備以上に求められています。市長たちは、学校での失敗に対策を講じるためのなんらの権限を持たないことから、力を削がれています。しかし、たとえ国の教育制度が手段を持ち合わせず、動き出さずにそのことに満足しているとしても、何かを取り戻すことができなくても、再びタルテュフになるのはよしでしょう。そして私は、国の教育制度について、教師が上のことで悪く評価されているのではないかと心配です。現場では、人々は多くを期待し、教師や私はあらゆる手段を持っている訳ではないのです。また、われわれの購買力が非常に不平等であることを付け加えましょう。イル・ドゥ・フランス州で3～4年前でしたが、コミュンの活動の自由を1から10の段階に分けた当局の研究がなされました。それによると、イル・ドゥ・フランス州で最も手段を多く持つコミュンの一つであるヌーイ・スュル・セヌは一つのサービスを提供するために10ユーロを持つのにたいし、クリシーの市長は1ユーロしか持たないというのです。人は、状況を深刻化する不平等の中におかれているのです。私が1995年にこの職に就いた時、学校の施設・設備はひどい状態でした。私は修復に取り掛かりましたが、昨年になってようやく、電気設備、塗装工事、衛生工事などを普通の状態に戻し、備品類も備えることが出来ました。したがって、1995年から2005年までの期間がこれらの学校を標準の状態に戻すのに必要であったのです。もし私がより多くの手段を持っていたならば、半分の期間でもやり終えたでしょう。このように地方

公共団体の間に、不平等があるのです。ですので、政府だけがその改善策を持ち得、ジャン・ルイ・ボルローがそのような措置を講じたことは評価しなければなりません。彼は調整基準すなわち国の補助の基準を改善しました。私は、いつも彼に同意するわけではありませんが、良い事をしました。彼の間違いは彼がヴァランシエンヌで経験したことを、国のレベルで進めようとしたことです。たとえばPRU（都市改善計画）です。私が彼と話したとき、私たちは君僕で話しますが、私は彼に、“人が住居を変えること、それは良いが、人は全てを変えたがるものだということに注意なさいよ”と言いました。彼は私に、“でも、ヴァランシエンヌではうまくいったし、これからもううまくいくと思うよ”と言いました。ヴァランシエンヌではそのとおりでありました。問題を抱えていた郊外の改革の施策を推し進めました。私が“注意なさいよ”ということに、彼は満足していませんでした。彼のヴァランシエンヌでは失業だけが問題であったのですが、私の町では、住民が技能を持っていないから職にありつけないのです。私が言いたいのは、物事がそれぞれのコミュンで異なるということなのです。彼の間違いは、彼がヴァランシエンヌで経験したことを通じて、その経験がどこにも通用すると信じたことです。そして、自分が期待した程度ではない結果が出たことを彼が分かったのは、ずっと後になってからでした。都市計画の改善の施策はいずれにせよ良かったことで、ボルローはかなりよい仕事をしたと言い得るでしょう。

あなた方の質問に答えるために、また、地域から少し離れて見ると、この困難を抱えた郊外の問題は、二重の意志によってのみ解決できるのです。一つは私が言ったように、強力な国家の意志、すなわちどのような社会で人が生きることを望んでいるのか、つまりゲッターを解消しようという国民的意志です。しかし、優先順位・緊急度は地域に依拠しているのですから、地域で取られる措置は異なるのです。例えばクリシーでは、二つの主要問題があり、一つは交通で、もう一つは道路を作る

ために障害となる私有地の問題です。もしあなたが、数キロ先のオルネー・スゥ・ボアに行けば、通過している自動車道の傍らにRERの駅があるので、私有地の問題も交通の問題もないのです。そこで、オルネー・スゥ・ボアもしくはクリシーから外に出かける場合、困難さがまったく異なり、したがって対応策は同じではないのです。こうして、強い国家の意志を必要とし、“あらゆる部門で手段を用意することです”と人は言いますが、同時にすべての地域に同じ手当てを施すことはできないのです。町の政策として、“プレタポルテの方式は終わった”と私は言いたいのです。プレタポルテが通用しないのは、優先性や緊急性が地域によって異なるからなのです。議員たちによってではなく住民たちによって了解される、本当の意味での地域の定義が必要なのです。彼らこそ、彼らが望んでいること、必要としていることを知っているのですから。彼らは特別なことを望んでいるのではなく、皆と同じように生きることを望んでいるのです。私や私の協力者はPRUで多くの時間をかけて働いていますが、クリシーの住民は、情報提供の集会を呼びかけてもあまり集まらず、始まって15分くらい経つと、アパートのエレベーターが故障しているとか階段が汚れているとか話し出します。彼らが言っていることは正しいのです。そのような状態から抜け出すには、諸手段の組み合わせが求められますが、それら諸手段が町ごとに異なるのですから、強い政治と国の方針との良好な連携が必要です。もしクリシーで5人のためにクラスが必要だとしても、別の町では30人のクラスとなるでしょう。誰もがそれを認めますが、努力が必要なのです。非常に強い国民的意志が必要ですが、それは、そのような意志が手段を動員し、同時に解決のプログラムが現場を踏まえたものでなければなりません。これはまさしくプレタポルテではなく、注文による施策にはかならないのです。

私は公共サービスの上での不平等について話してきました。クリシーでは、届いている手荷物を受け取るのに、ポストで1時間も雑談をして待

たなければなりません。パリでは考えられないことです。

質問

オルネー・スゥ・ボアも暴動の時困難を抱えたのですよね。

市長

はい、大きな困難を抱えている地区ではそうでしたが、一箇所だけで、ほかはクリシーの場合とは違いました。また、緊急な解決を求められませんでした。目的は一緒でしたが、それに達する方法は違っていたのです。オルネーは町として同じ措置を講じましたが、優先度が違っていただけで、充分効果的ではありませんでした。

質問

都市圏共同体内の別のコミューンとの協力はどのようなでしたか。

市長

それは、二つの理由から難しいものでした。二つの貧しい者の結婚は決して豊かさを生み出さず、誰も私たちの町と結びつくことを望まないからです。さらに偽善もあります。モンフェルメーユの広い市域の中に呑み込まれるのを誰も望みません。クリシーもモンフェルメーユもどちらも多くの手段を持っていないので、難しいのです。また、私たちは政治的に対極にありますが、それはいくつかの課題、たとえば公共交通についての連携を妨げるものではありません。いくつかの事柄についてお互いに共通のヴィジョンを持ちますが、我々を隔てることについて、イデオロギー的な差異を超えて議論しあい、人間的に良好な関係を持っています。モンフェルメーユの市長はアレテを出しましたが、私は彼には同調せずむしろ反対し、なぜそうするのかを彼に説明しました。残念ながら私が彼に話したことは尊重される結果となりました。というのも現在彼は、おおいに苦勞しているからです。彼のコミューンは大きな苦しみにあっており、残念なことです。しかし彼はむしろ権威主義的で、彼のコミューンで権力を維持することに懸命で、代理を置くことはありません。私は共同体の有用性に関するヴィジョンを持っています。コ

ミュンは良いものですが、コミユンの範囲では調整し得ない一定の主題が有ると私は考えています。私は私の権力に執着してはいません。それは貧しい者の権力であり、もし私が何がしか私の権力を失っても、何らかの手段を得られるのであれば、私はそのほうを好みます。いずれにせよ私は物事を得るために戦っているのです。私にはお金がありません。そこでそれを探しに出かける時私はコゼットの役を演じるのです。

質問

あなたは物乞いをする。

市長

私は、国に物乞いをするのです。あるいはもし私が共同体の中で力関係に加わるとしても、それは私を悩ますものではありません。このことは、人が困難の中に入ることを意味しますし、それはまた、それほど悪く機能することではないということも意味します。ある事項については賛成しますが、ほかの事項では反対します。失礼、電話です。次の訪問者が待っているのです。

質問

ところで、不躰なつもりはないのですが、クリシーには外国籍の住民が何人くらいいるのですか。

市長

私には外国人の数が分からないので答えることは出来ません。法的な意味では43%です。これは大きな数です。これ以上のコミュンはオーベルヴィリエだけです。

質問

県の中での平均はどの程度でしょうか。

市長

正確には答えられませんが、ずっと低いです。移民についてではなく、外国人について話しています。つまり、フランス国籍の身分証を持たず、いずれ移民となる人々のことです。外国人住民と移民住民の区別はありますが、フランスで生まれた外国人もいます。43%というのはフランス国籍を持たない者のことです。移民の中にも身分証（滞在許可証・労働許可証）を持つ者もいれば、持たない者もいます。フランスには、外国人と外

国人のままの移民とフランス国籍を獲得した移民がいるのです。ル・モンドに国の規模での移民の状況についての記事が載りました。

途中ですが、次の面会が。

質問

いらっしゃって下さい。ありがとうございました。